2016－11－21 資料　前回感想・コメント等

1. アメリカの反ユダヤ主義の一つに、国内の失業者が多くいるのに何でユダヤ人を受け入れないといけないのかという経済面があるという事実は、今のトランプ氏とそれに賛同する国民とほぼ同じ状況なんだと衝撃を受けました[1]。また、前回の質問の解説の中で、なぜ日本は TPP に賛成するのかという点で、最初はアメリカが推進しているから、日米強化をするためと言っていたければお、今はトランプもクリントンも TPP 反対を唱えていて、日本はどこに向かって賛成と言っているのか、強行採決をしたのかわからなくなりました[2]。・・・私たち国民が反 TPP を主張しないのも、まだ現実のこととして考えられない（見て見ぬふりをする）からか[3]と、焦燥感を抱きました。
2. 第二次世界大戦期の生活水準は、ドイツより日本の方が低かった[4]と別の講義で聞きました。ユダヤ人の強制労働等は関係あるのか、または日本において似たようなことはあったのか、あったらどの程度のものだったのかが気になりました。ドイツ人と「ユダヤ人」の配給の差があったのかなども気になります[5]。

---

[1] 違っているのは、「イスラム教徒排除」、メキシコ人等ヒスパニック系排除、という対象の違いですね。

[2] 日本にも、またアメリカにも、「自由貿易」推進派が強力な勢力としています。日本の場合、経団連がそれです。大企業中心の財界組織は、「自由貿易」の徹底的推進で、有利になると計算しています。しかし、中小企業・農業などから、強い反対があります。どのような勢力が、どのような利害から、賛成・反対するのか、これを見極めていく必要があります。アメリカの場合も、「自由貿易」を推進してきた勢力は、利益率さえ高ければ、産業の空洞化、産業の海外移転、国内の就業者数の減少など、意に介さないという勢力と重なり合います。

[3] 一つの理由は、TPP の交渉内容が秘密のベールに包まれ、出される資料は多くの部分が黒い墨で塗って隠されていて、マスコミでも、TPP によって、日本の経済がどうなるのか、明確にしえない問題もあるでしょう。しかし、基本的には「自由貿易」推進の政策であり、競争力の比較優位にある企業・地域・国が、有利になる、という貿易システムであって、各国・各地域の構造的な違いなどが無視され、保護されないという点が根本にあるといえるでしょう。条約関係諸国を自由に移動できる資本は、有利な国・地域・企業に活動の場を移しますが、そうした活動の自由を持たない広範な労働者・市民には、構造的失業が待ち受けている、ということでしょう。これが、「ラストベルト」と言われた工場閉鎖でさび付いた施設を多く持つ地域の労働者・市民で、TPP に反対するトランプを支持する率が高かった（トランプ勝利）ことの重要な原因でしょう。

[4] ドイツと日本との比較もしてみるべきですが、ドイツ人とナチス・ドイツが侵略し、支配下に置いた地域の人々との格差をこそ、見るべきでしょう。その点は、日本についても、日本人と日本が占領や植民地支配していた中国や朝鮮の人々の生活水準・生活状態とを比較してみるべきだということにもなります。どこで、餓死者が多く出たか、貧窮度は、支配する側と支配される側とでは、どのように違っていたか、など、調べてみる価値と十四末井があります。

[5] ナチス・ドイツは、占領地他地域から、大量の食糧を強制的にドイツに運びました。それは、第一次大戦の中盤から末期に、ドイツ人が飢餓状態ににになって、ストライキなども発生した経験から、ドイツ人自身には何とか食料を供給しようとしたことが原因です。しか

3. ヨーロッパの血統による優劣（の差別）が、アジアに住む私たちにはよく分からないと思ってしまうが、これがアジア、東アジア、とくに日本の、太平洋戦争前後の朝鮮人や東南アジア諸地域との関係性や意識を考えると、一目瞭然だなと思った。科学的根拠のない優劣意識は、いったいどこから来るのか、そして、それはアジアと欧米圏など、地域によって意識の違いはあるのか、[6]改めて考えたいことでだと思った。
4. 反ユダヤというものがキリスト教などの宗教対立が根底にある[7]とのことで、割と最近起こったものだと思っていたので、驚いた。また、イギリスやアメリカにユダヤ人が亡命したということは知っていたが、なるべく子供を引き取っていた[8]ということは知らなかった・・・・。ユダヤ人の移住というものは、結局場所があれば、どこに連れて行きたかったのだおろう[9]とも考えました。

し、そのことは、戦時下で生産が減少する中で、占領地からは食料が奪い取られるわけで、飢餓状態は、占領地において、そこでも特にユダヤ人に押し付けられることになります。

ドイツ人と「ユダヤ人」の配給の差は、歴然と、また厳然と、存在しました。しかも、公式に決められた格差のある配給基準さえも、守られず、実質はユダヤ人にとって、配給基準で示された以上に厳しく、さらに、そうしたユダヤ人さえも、「大食漢」とされ、そもそも食料を与えないで済む「口減らし」（絶滅）の対象となりました。拙著『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆　1941～1942』同文舘、1994 年にも、こうした事実を紹介しています。

[6] 非常に重要な問題であり、検討してみるべき価値のある問題ですね。一つの重要な期末論文のテーマとなり得るものですね。

[7] 西暦 2016 年ですから、約 2000 年にわたって、宗教的にはユダヤ教とそレに対する批判としてそこから新たな福音を掲げて登場したキリスト教が対立するものであることは、そもそもの出発点にあると言えましょう。そうした宗教的な対立なり違いが、信者への迫害・差別となるか、あるいは寛容な相互尊重となるかどうか、これが 2000 年の歴史の中で、問われ続けてきたことでしょう。ナチズムの場合は、宗教的な違いや対立を、民族的・人種的な違いと対立・敵対とみなして、ユダヤ人を排除する、という立場です。その排除の仕方が、追放という形態をとるか、最終的な絶滅という形態となるか、これは、さまざまの条件、とくに戦争などによって、異なってきます。

[8] 「キンダートランスポート」という救出作戦のことですね。約 1 万人のドイツ・オーストリアのユダヤ人の子供が、救出された、と。逆から言えば、圧倒的多数のユダヤ人の子供は、大人と一緒に、「東方への移送」、「東方への疎開」の対象となり、結局はガス室送りとなった、という厳しい現実が、戦時下で進行します。

[9] 講義の中でも説明したことですが、ユダヤ人をどこに連れていくか、どこに追放するかは、最初から明確に決まっていたわけではありません。1939 年 9 月にドイツがポーランドに攻め込んだ時、最初は、ポーランド東南地域のルブリン地区に、ユダヤ人「居留地」を作って、送り込むことが構想されました。しかし、その政策を戦時下で実行し始めると、そもそも、ポーランドのルブリン地区に大量のユダヤ人を受け入れる余地などなく、頓挫してしまいます。

そうこうしているうちに、西部戦線での戦いが始まり、ドイツが電撃戦でフランスに勝利します。そうすると、この敗北したフランスから植民地（その一つマダガスカル島）を取り上げて、この島にドイツに支配下に置かれた 500 万人のユダヤ人を送り込もうという計画が出てきます。でも、その前提は、フランスが、「ハイ負けました。マダガスカルを差し上げます」と合意しなければなりません。しかし、フランスのロンドン亡命政府は、ドイツとの戦争を続けることを選択します。戦争は継続です。講和は成立しません。

5. ソ連の共産主義を打倒するというイデオロギーの闘争と、ユダヤ人を排除するというナチスの掲げる政治的な保身が、戦争の混乱の中で結びつていく過程は、講義で解説されていたと思いますが、イデオロギー対立である反コミュニズムと人種的な分類に基づく反ユダヤ主義という質の違う問題が**結び付く**[10]というのが、平時に暮らす自分にはどうしても腑に落ちません。国民を戦争に向かわせる戦時の国家体制では、こうした世論誘導的な言説が詳しく検討されずに定着してしまうというのが、恐ろしいところだと思いました。
6. ドイツのユダヤ人虐殺の報告書について。1 枚にかなり膨大な数のユダヤ人が殺されたことが書いてあったので、それすらも、一部の部隊であることを思えば、恐ろしいことと思った。報告書は、結構、事細かく、人数が書かれていたりするが、戦時において、こうした**報告書を作るのは当たり前**[11]だったのか、何か意味を持っていたのかと思った。アメリカにおける反ユダヤの流れや状況というのが分かった。

その中で、ヒトラー、ナチス・ドイツは、ソ連を責めることを決断しました。
そのソ連占領政策を練り上げるうちに、それに似は白ロシアの湿地帯やシベリアにこう偉大な人口希薄地があるので、そこにヨーロッパのユダヤ人を追放しようという構想となります。これが実現する前提は、ナチス・ドイツがソ連に勝利し、ソ連が「ハイ、分かりました。シベリアをユダヤ人居留地として差し出します」と認めなければなりません。
しかし、実際は？
逆にドイツが、ソ連との泥沼の戦争に入り、むしろ負ける、敗退するという状況になってきます。
ユダヤ人を送り込む場所は、まったくなくなってしまいます。
ですが、「ユダヤ人をヨーロッパから追放する」というヒトラー・ナチスの掲げた目標からすれば、どこか「東に」送り込まなければなりません。
東に送り込む、移住させる、しかし、東にその場所と可能性はない。
どうするか？　ガス室の必然性が出てきます。この点、拙著『独ソ戦とホロコースト』日本経済評論社、2001 年、および『ホロコーストの力学－独ソ戦・世界大戦・総力戦の弁証法―』青木書店、2003 年を、読んでみてください。

[10] 自動詞「結びつく」ではなく、ヒトラーが『我が闘争』や演説で、「結びつけた」のです。
そうした言説が誤っていることは、ヒトラー・ナチスに批判的な人々・政党には自明ですが、その批判的な人々・政党は、ナチス政権誕生後、逮捕投獄され、結社の禁止で存在を認められません。ですから、社会を多く言論は、ナチスの思う通りの言説を巨大なマスコミを通じて、国民に流し込む、ということになります。

[11] **アインザッツグルッペという特別部隊（翻訳としては、特別出動隊、機動隊、**その他いろいろの和約があります）は、その任務として、正規の軍隊の戦闘（前線）が終わり、**後方地域となった占領地域**において、治安平定・秩序維持の課題を与えられます。その秩序維持のための一つの方策として、「不穏分子としてのユダヤ人」、「戦争の原因となるユダヤ人」などなどの位置づけ（イデオロギー的断定）で、ユダヤ人を駆り出し、殺戮していくわけです。報告書は、ここでドイツ兵が襲われた、この村で放火があった、その他不穏な事件のあった場所に次々と出動し、そこで、いちいち犯人さがしをするのではなく、ユダヤ人を一網打尽に駆り出し、「犯人として」処刑する、ということになります。ですので、治安平定行動という任務をどのように達成したかの報告書は、「**仕事の報告書**」であり、仕事に対応した必然的なもの、ということになります。部隊の人々の意識は、与えられた任務の遂行意識、ということになります。その任務の当否は、問わない意識となっています。

7. ユダヤ人絶滅のため、11 日間で 3 万人もの人々を殺害する[12]など、事細かく人数や酒類の内訳が書面にて示され、その報告書に責任者がサインする。イェーガー[13]のその時の心情が気になって仕方ありません。結局（リトアニアで 1941 年 12 月時点で）残されたのは、たった 3 万人の労働ユダヤ人であったという k 十ですが、彼らも、労働力として使い捨てにしていくという考えは理解できました。しかし、その労働力であった彼らを殺害する行為を禁止した[14]のも、まだまだ労働力が足りなかったためであるという位置づけなのでしょうか？
8. 外務省に「ユダヤ人課」というものまで作って、まるで害虫処理のようにユダヤ人問題を扱っていたのだなと、改めてひどい社会だったんだなと思いました。社会主義で大きな国を作り上げたソ連[15]について、もう少し調べてみたいと思いました。

---

[12] 3 万人というのは、キエフ郊外バビヤールにおける 3 万にンのユダヤ人の殺害に関することですね。一足飛びに、「ユダヤ人絶滅」とはなりません。ソ連軍とドイツ軍のキエフ攻防戦が一か月続き、ドイツ軍がソ連軍を撃破し、キエフを占領します。そのあとに起きた一大殺戮事件ですね。しかも、これは、アインザッツグルッペ C の作戦・活動報告書に記載されていることです。イエーガーは、アインザッツグルッペ A の第三出動コマンド（EK３）の責任者です。

[13] イエーガーは、その報告書を見ると、アインザッツグルッペ A の責任者として、対ソ攻撃開始から、次々と出動し、自らの部隊の任務に従い、作戦の成果を詳細に記録に残しているという意識です。「殺害」、「殺戮」という意識ではなく、「治安を乱すもの」として、キエフのユダヤ人を排除する、「処刑する」という正当化の意識の下に、行動しています。「処刑」という言葉は、罪あるものに「刑」に処する、というわけです。問題は、「罪」がユダヤ人にあったのかどうか、ということです。イデオロギー的な断定では、「ユダヤ人に積みあり」とされたわけです。

　現在の日本では、死刑制度があります。その場合、死刑は、法と裁判に基づくものとして正当化されています。あなたは死刑制度をどう考えますか？少なくとも、ヨーロッパ・EU は、死刑制度を廃止しています。

[14] 史料（イェーガー報告書）が示すところでは、労働力として使っているのは、ドイツの「民政当局と国防軍」です。これらの機関・組織は、労働力を必要としていて、ユダヤ人でも使えるものは使っていた、ということですね。それに対して、イエーガーは、治安秩序の確立のためには、こうしたユダヤ人も不穏分子・敵対行為者となり得るものとして、できるだけ速やかに処刑したい、という立場だったということでしょう。戦闘で破壊された地域を占領したドイツは、その地域から可能な限り、物資を調達する必要があり、人手が何としてもほしかった。ユダヤ人でも活用せざるを得なかった。しかし、活かしておけば、ユダヤ人が抵抗派になったり、抵抗運動に協力したいと、治安不安定化の要因になるとみて、抹殺しておきたいというのが、アインザッツグルッペの考え方であった、ということになります。

[15] 「社会主義」が、ソ連の看板でした。しかし、その「社会主義」は、社会が主人公になる社会だったかというと、実際には、国家が主人公、国家を握る官僚が主人公、官僚を握るボルシェヴィキが主人公、ということになってしまいました。「社会主義」に理想と希望を持った人々が世界中でいましたが、そして、ソ連でそれが実現しつつあると思われていましたが、実態は、とりわけスターリン支配の下では、まったく逆になっていた、人口の圧倒的多数を占める農民は厳しく押さえつけられていた、ということがわかってきています。ぜひ、このソ連とは何であったのかをしっかり調べてみてください。

9. 5 章の「ポーランドにおけるユダヤ人迫害と暴力支配」というところで、「現地の一般住民に対して行われたドイツ人の犯罪が非難されるのは稀であり、結局は、犯人はヒトラーの『恩赦』によって完全に刑を免れた」という事実に、大変驚きました。このようにしてまでドイツ人を棚上げにするヒトラーの心理が疑問でした[16]。前回の感想にも書いた「国家の利益」とは何なのか、自国民の犯罪をなかったことにする行為も、ヒトラーにとってはその中の一つだたのか・・・[17]。現代においても、トランプやイギリス（EU離脱派・排外的ナショナリスト）が言う、「国民が貧困だから移民は排除すべき」という考えは、「国家の利益」になるのか・・・・。何かを排除することによって得られる利益は何なのか、もうすこし考えてみたいです[18]。

---

[16] ドイツ人第一主義は、ここにも貫徹しますね。不法・罪を問わないわけですから。そのことは、当然にも、ドイツ支配下に置かれたポーランド人に、反ドイツの意識を強めさせ、抵抗運動のエネルギー源となります。ポーランド人の反ドイツの秘密運動「地下運動」が、次第に強靭に広く深く形作られるということになります。

日本が、中国で行った戦争と支配の在り方（差別と抑圧）が、中国における反日運動のエネルギーを強め広め、抗日民族統一戦線を次第に強大にしていきます。

[17] その通りですね。市民的感覚では不法そのものですが、その不法を押し通す政治体制であり、イデオロギーであった、ということになります。

[18] まさに、この問題こそ、現代世界を考えて行く、重大問題です。しっかり考えてみる必要があります。